

丸山博正「東宗要」における諸行非本願説（『仏教文化研究』三二、一九八六年）  
 坪井俊英「良忠上人の浄土教学における念仏と諸行」（『良忠上人研究』良忠上人研究会、一九八六年）  
 廣川堯敏「良忠上人述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（二）」（『良忠上人研究』良忠上人研究会、一九八六年）  
 廣川堯敏「法然門下における専修念仏義の展開」（『浄土教文化論』山喜房佛書林、一九九一年）  
 神居文彰・田宮仁・長谷川匡俊・藤腹明子「臨終行儀—日本のターミナル・ケアの原点」（北辰堂、一九九三年）

## 聖阿の教説と福祉思想

吉水 岳彦

浄土宗中興の祖 了誓聖阿上人（二三四一—一四二〇）

聖阿上人（以下敬称略）は、浄土宗の第七祖にして、宗脈（浄土宗義の相伝の系譜）と戒脈（円頓戒の相伝の系譜）の二つの伝法形式を確立し、現在にいたる浄土宗僧侶養成の礎を築いた人物です。幼い時に南北朝の合戦で父を失い、八歳の時には瓜連常福寺の開山了実のもとで出家し、十五歳で了実の師である蓮勝に師事、十八歳で鎌倉光明寺三世の定慧に学び、二十五歳で宗戒兩脈を相伝されたといえます。また、十数年かけて天台・真言・禪・俱舍・唯識・神道・和歌など、仏教内外の典籍を広く学んでいます。そうした深い学識のもと、当時盛んだった禅宗僧侶からの非難に論駁し、「五重相伝」という浄土宗義の伝法の形式を打ち立て、その教えの超勝性と独自性を示しました。著作には、『浄土三蔵二教略頌』『釈浄土三蔵義』『教相十八通』『顯浄土伝戒論』など多数あり、中世後

期以降の宗侶養成のテキストになっています。

#### 本節の概要

浄土宗僧侶であり、社会事業家としても活躍した渡辺海旭（二八七二—一九三三）は、法然・聖阿両祖の思想の異同について論じるなか、「選択本願」「大悲本懐」「万機普益」が両祖の一致する点であり、聖阿が単信大信（ただ阿彌陀仏を信じ念仏を称える者は往生できると信じること）を主張し、散心念仏（散り乱れた心のまま称える念仏）を正宗としている以上、両祖の思想は一致符合していると述べています。海旭の主張する生活宗教としての浄土教や浄化主義は、両祖の思想のなから導き出されたものであり、散心念仏を相続する生活のうちには福祉的活動を行うべきであるとしています。法然と聖阿の教説を知り、そこにみられる福祉的思想を考察することは、海旭のような社会事業を行った僧侶を育んだ教えがいかなるものであったかを知ることであると同時に、浄土宗の僧侶となる上で学ぶものなかに福祉的思想が含まれているか否かを探ることにもなるでしょう。本節では、聖阿の教説をみていき、そこに含まれる福祉的思想を考察していきます。

### 一、聖阿における念仏と諸行

聖阿の教説のもっとも特徴的な点はその教判にあります。聖阿の活躍した室町時代は禅が盛んに行われた時代であり、法然浄土教は夢窓疎石（一二七五—一三五二）や虎関師錬（一二七八—一三四六）などといった著名な禅僧から「寓宗（他宗に付属しているに過ぎない宗旨）」であり「大乘の説ではない」と批難

されることもありました。聖阿はこの状況において、五重相伝を制定し、円頓菩薩戒の相承を明確化することで、浄土宗僧侶たるものが必ず伝持しなくてはならない宗脈・戒脈という相伝の形式を確立したのです。すなわち、自宗の宗侶養成の基礎を固め、教団の再構築を行ったのです。さらに、聖阿は他宗からの論難に対し、浄土宗の正当性を示すばかりでなく、浄土の教門が他宗の教義を超絶した「究竟窮極の大乘」であることを示す教判を確立します。それが聖阿の「二藏二教二頓教判」です。

聖阿は善導の釈義によって一代仏教を菩薩藏（大乘の教え）と声聞藏（小乗の教え）に分け、そのうち菩薩藏を漸教（長い間の修行によって悟る教え）と頓教（すぐに悟ることができる教え）に分け、さらに頓教を性頓と相頓とに分けています。法華や真言、禅の教えはすみやかに悟ることができる頓教に属するものの性頓（理・性に基づいて悟る教え）であるのに対し、浄土宗の教えは相頓（相対的な対象を立てて悟る教え）にあたるとしています。この二頓の異なりについて『釈浄土二藏義』（以下『頌義』と略す）には、

性頓は機情の一乗なるが故に解会を待ちて如なり。相頓は仏意の一乗なるが故に解会を待たずして自爾に如なり。機情の一乗は調機を帯びるが故に還りて格を超えず。仏意の一乗は弘願を開く故に超にして而も亦た超なり。況や彼の即身も猶お分証なり。其の自覚の心を以て仏の名を得れども、然も究竟大牟尼の位には非ず。浄土の得果、



聖阿上人像（芝増上寺蔵）

「豈に是れ爾ならんや」〔浄全〕一二・三四二下。

とあります。性頃の教えは一切衆生が等しく成仏できる教えではあるものの、行者が機根を磨いて法の了解を得待たねば真如に達することができません。これに対して相頃の教えは、煩惱を絶たない凡夫も仏意に順じて称名念仏すれば、仏が一切衆生を等しく救わんとして建てられた本願に乗じて有相の極楽浄土（真如・涅槃界）に入ることが出来ます。さらに、得たところの証果についても、性頃では成仏するといつても一分の悟りに過ぎないが、浄土における成仏は真に仏と同じ位に入ることができると述べています。また、

今此の相頃は終窮の極談、済凡の秘術なり。直に方域を立てて無方域に即し、正しく色相を仮りて無色相に即す。無二を行ずること無けれども、而も色心を一法に悟り、不離を解せずして、而も性相を一心に開く。見生の当体を改めざるの凡夫、覺らずして無生の本際に転入す。煩惱の迷本を断ぜざるの衆生、立地に涅槃の常樂を証得す。有相の心を以て無相の悟に契い、事相の行を以て実相の門に入る。事中に理を得、理中に事を施す。理事縦横、自在無碍なり。仏願此の功を開発し、愚凡彼の位に合会す。但し相の名を安ずることは唯理唯性の頓教に超過することを顯さんが為なり。（中略）今此の相頃は仏願の所建なるが故に、事理縦横なり。仏意の一乘なるが故に、而も機の悟解を待たず。相は是れ即相なり。生は是れ無生なり〔浄全〕一二・二六上（下）。

とあり、相頃の浄土宗の教えこそ大乘仏教を極めつくした上で説かれた凡夫救済の秘術であり、聖阿はその理由を仏願（仏願・仏意）に求めています。阿弥陀仏は真如实相の理からすれば本来無方域であるところに西方を立て、本来無色相のところ色相を具えた極楽浄土を建立しました。そうであればこそ、

色心無二・性相不離を悟らず、煩惱を絶つこともなく、実我実法を離れきらない有相の心（さまざま現象に執着する心）をもった凡夫が、事相（個別具体的な行相）の称名念仏によってそのままに極楽浄土へ入ることができ、そこで涅槃の常樂を得、実相の門に入ることができると聖阿は説いているのです。阿弥陀仏の仏願を根拠としているから理と事は自由自在であり、有相の浄土・事相の念仏といつても仏意から唯性の上に示されたものであることを述べています。

ここで着目したいのは、聖阿が「有相」「事相」であるゆえに浄土宗の念仏の教えが他宗の教義を超過するものであると述べている点です。他宗の教えも釈尊の教えであり、法華・真言・禪にいたっては大乘仏教のなかでも勝れたものであることは、聖阿も認めているところです。しかしながら、浄土宗以外の教えは結局「調機の一乗」、すなわち衆生の機根を磨かねばならず、千差万別である衆生の機根によつて修行の進行も成果も異なる以上、真にすべての人を平等に救う教えとはいえないとしているのです。どんなにすばらしい教えであっても、対象となる人に行えず、理解できないようでは意味がないと聖阿は論断しています。

煩惱を離れられず、同じ過ちを繰り返してしまう末代愚鈍の凡夫にも、極樂が「有相」であればこそ明確に行き先を知らしめることができ、そこへ至るための称名念仏が「事相」であればこそ容易に実修することが可能なのです。阿弥陀仏が大慈悲から五逆十惡の凡夫まで平等に救おうとする本願にかなない、出世の本懐としてこの教えを開示した釈尊のみ心にかなうのが称名念仏であり、それ以外の諸行に超出していると聖阿は説いているのです。

## 二、念仏者の生活と慈善

次に、聖阿が念仏生活と修善・作善の関係について言及している箇所を中心に見ていきます。

『頌義』別願義の中に次のような問答があります。

問う、平等覚經に慈心作善して我が国に來生せずということ莫しと云い、此の經は身心柔軟にして人天に超過すと云う。然るに現に世人を見るに此の益無きに似たり如何。答う、仏願唐捐ならず、仏語に虚妄無し、何ぞ之を疑わんや。但し執難に至りては牛羊の眼を以て而も人を弁ずること莫れ。若し安心決定して撰益を蒙る人は外邪異見の難に墮せず。信心不退にして深く穢土を厭うが故に、今生は執心少なし。切に淨土を欣うが故に、憂苦の恨み薄し。淨土欣慕已前の我れには似るべからず。三毒の煩惱はこれ正にして邪少なし。我れ、我れを知るべし、豈に人に尋ねんや（『淨土』一一・二八二上）。

『無量壽經』とその異訳である『平等覺經』には、それぞれ阿彌陀仏の光明に触れることで、慈しみの心が生じて善をなす、あるいは、身も心もやさしくなつて布施・慈悲・智恵の三善根を修して人間や天人よりも勝れたものになりたいと説かれています。ところが、現実に世の中の人を見てみても、そうした利益がないに等しいようにみえるのはどういふことなのでしょうかと、聖阿は念仏の利益における作善の有無について問いを出しているのです。これについて聖阿は自ら仏願・仏語は虚しいものではなく、疑うべきではないと答えています。そして、そもそも牛や羊のごとき凡夫の眼をもつて他人を評量すべ

きではなく、安心決定して阿彌陀仏の撰益を受けている人には明確に変化があることを述べています。ここで聖阿は、念仏者が安心決定して仏光に照らされ、信心不退となることによつて、淨土欣慕以前の自己とはまったく異なる自己となる、すなわち、一種の人間性の向上があることを指摘しているのです。その変化の内容は以下のとおりです。

- ① 他の信仰に惑わされることがない
- ② 深く穢土を厭うために今生に対する執着の心が少なくなる
- ③ 切に淨土を欣うために今生の悲しみや苦しみによる未練や嘆きが少なくなる
- ④ 三毒の煩惱の邪な働きが少なくなる

聖阿はこうした四種の変化は、阿彌陀仏の本願の働きと念仏者の信仰深化の過程に起こり、こうした変化は自身で自覚するものであつて他人に尋ねて確認することではないと説いています。聖阿の設問の内容からすれば、この変化こそ、念仏者が「慈心作善（慈しみの心が生じて善をなす）」を行う状態を指すものと考えられます。つまり、念仏者は阿彌陀仏の本願の光明を蒙り、信仰が深化して安心決定すると、厭欣心の増長と三毒煩惱の制止が起こり、これによつて自然に慈心が生じて善を行うようになるということです。

ただし、今挙げた四種の変化には、『平等覺經』の本願の文に「慈心作善」とあるような、具体的な「作善」を指す内容はみられません。これは本願の光明に照らされることによつて直接的に「作善」を行う心も生じるが、一方で衆生の側の厭欣心や念仏相続のあり方が重要な役割を果たしていることにも、その理由があると考えられます。

続いて聖阿における厭欣心と念仏相統のあり方についてみていきます。聖阿の厭欣心についての言及は、『頌義』の厭穢義、欣淨義、菩提心義、三心義にあります。そのうち「修善」と結び付けて解釈されている箇所が、三心義にみられます。それは、

一つには、真実心の中に自と他との諸悪及び穢国等を制捨して、行住坐臥に一切の菩薩の諸悪を制捨したまえるに同じく、我れも亦是くの如くならんことを想うなり。二つには、真実心中に自他凡聖等の善を勤修するなり、已上。利他真実とは他を教化するの時、内外真実なれと教ゆるなり。自利真実において十重の厭欣有り。三業の離と合との止悪修善有り。委細は大師の高判の如し云々〔浄全〕一一・一六〇上。

というところです。ここに聖阿は善導『観経疏』の至誠心積の内容に、諸悪の制捨と十重の厭欣の意があると説いています。この「制捨諸悪」と「十重厭欣」とは、聖阿『頌義見聞』に、

制捨諸悪とは、問う、聖道の機、尚お諸悪を捨て難し、況や浄土の機をや。一悪尚お制止難し、況や諸悪をや。答う、諸悪莫作は是れ諸仏の通戒なり。浄土の機、何ぞ此の意樂無からんや。但し難に至りては、誰か言う諸悪を全断すとは。ただ是れ制捨の意樂を発すべきなり。賢を見て齊しからんと欲すれば愚なりと雖も賢なりと。況や想同という、疑と為るに足らざるや、云々。十重厭欣とは只だ是れ止悪修善なり。之に付いて始めには三業総合して厭欣す、是れ二重なり。終わりに亦三業総合して厭欣す、是れ二重なり。前後拾い合わせれば四重なり。中間に三業離して厭欣す、是れ六重なり。此の五双十隻を指して十重の厭欣と云う。是れ厭欣に各十重有るに非ず。乃ち是れ三業の離合の止悪修善なり。委くは一家の高判の如し、云々〔浄全〕一一・四九八上(下)。

とあり、浄土門の人であってもその三業において諸悪を離れ、善をなすべきことを教えています。それに加えて聖阿は、善導の釈義に基づいて至誠心(往生を願う人が具えるべき裏表のない心)のうちに「制捨諸悪」「止悪修善」が行われることを指摘しています。すなわち、それは往生浄土のための念仏を修するなかに自然に具わる至誠心のうちにある厭欣心が、「止悪修善」へと向かわせるということです。善導『観経疏』の十重厭欣該当箇所(①-⑩)には、

又た真実に二種有り。一には自利真実、二には利他真実なり。自利真実と言うは、復た二種有り。①一には、真実心中に自他の諸悪及び穢国等を制捨して、行住坐臥に一切の菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我も亦た是くの如くならんと想うなり。②二には、真実心中に自他凡聖等の善を勤修し、③真実心中の口業に彼の阿弥陀仏及び依正二報を讚歎し、④又た真実心中の口業に三界六道等の自他の依正二報・苦悪の事を毀厭し、亦た一切衆生の三業に為す所の善を讚歎す。若し善業に非ざるをば敬いて之を遠け、亦た随喜せざるなり。⑤又た真実心中の身業に合掌礼敬して四事等をもて彼の阿弥陀仏及び依正二報を供養す。⑥又た真実心中の身業に此の生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。⑦又た真実心中の意業に彼の阿弥陀仏及び依正二報を思想し觀察し憶念して、目前に現するが如くす。⑧又た真実心中の意業に此の生死三界等の自他の依正二報を輕蔑し厭捨し、⑨不善の三業をば必ず須く真実心中に捨つべし。⑩又た若し善の三業を起さば、必ず須く真実心中に作すべし。内外明闇を簡はず、皆須く真実なるべし。故に至誠心と名づく〔浄全〕一一・五五下(五六上)とあります。この「修善」の内容は、阿弥陀仏に親しい五種の正行(説誦・觀察・礼拝・称名・讚嘆供養)が中心であり、「止悪」の内容は、傍線部のように娑婆世界を含むさまざまな現実世界の苦悪を厭い離

れていくというものです。ここで念仏生活を行うものが厭欣心によって「止悪修善」へ向かうという聖阿の主張を、善導の所説とあわせ考えるならば、この現実世界の苦悪を厭離する過程こそが、阿弥陀仏と極樂浄土を欣求し、凡夫に善を行わせるという意味になるでしょう。そして、傍点部のような善の勤修とは、念仏を相續する凡夫が、阿弥陀仏に親しい行いを続けていくなか、菩薩が諸悪を制捨していくのを手本として行われる善といえます。

では、聖阿のいう念仏相續とはいかなるものであつたかを次に確認していきます。聖阿における念仏相續については、言及が多岐にわたります。ここではその中でも、念仏によって浄心を得るといふ言及が見られる『頌義』四修義の無間修積をみていきます。無間修積には次のような浄心に関する問答があります。

問う、凡夫の行人煩惱を問えず、浄心を修習すること、何ぞ之れ有らんや。答う、教の本意を挙げて且く上機を勧む。一切皆是くの如くなるべしと謂うには非ず。況や無間に念・時・日有り。何を以てか難しと為さん。煩惱随犯随懺悔とは、大師の釈に云く、随犯随懺、已上。凡夫の行者浄心を発すと雖も浄心数ばしば退し、貪瞋数ばしば起る。而れども、意樂に依りて随犯随懺して皆清淨ならしむ。即ち是れ煩惱を問えざる義なり〔浄全〕二二・二四六上。

これは善導『往生礼讚』に無間修に①阿弥陀仏に親しい行為以外の余業をまじえないという意と②貪瞋煩惱をまじえない意があるうち、②についての問答です。聖阿は、凡夫が煩惱をまじえずに浄心を得ることがあるだろうかと問を出し、煩惱をまじえずに浄心を得ることが教えの本意であるが、これは一切の人に対して勧めたものではなく、上機のものに勧めていたものであると答えています。しかし、

一方で、無間には、一念のように片時もまじえないという意味から一日の間まじえないという意味まで含まれることを考えれば、決して難しいことでもないと言っています。そして凡夫であっても、善導が罪を犯すに随つて懺悔を行い、心を清浄にするべきであると説いていることにしたがって随犯随懺すれば、煩惱をまじえないという無間修の本意にたがわないと説明しています。つまり、聖阿は、浄心がおきてもすぐに退転し、煩惱がすぐに起きてくる凡夫であっても、念仏相續の生活の基本となる四修を行ずるうちに、随犯随懺することになり、三毒煩惱をまじえず清浄な心をはぐくむことができると説いているのです。

以上のような、聖阿における念仏相續と作善に関する言及の内容を勘案するならば、聖阿における念仏相續と修善の流れは、次のようになるでしょう。すなわち、①念仏相續（四修無間修—随犯随懺の生活）により、②阿弥陀仏の本願光明に照らされ、③三心具足（往生に必要な三種の心が具わり、信仰が深化）し、④三毒煩惱の制止と厭欣心の増長が起り、⑤念仏生活のうちに慈心作善が行われます。この⑤がさらに①につながり、これが繰り返されていくのです。

聖阿は、主として善導の説示を用いることで、念仏相續の生活のなかに、厭欣心の増長による止悪修善と随犯随懺による浄心の修習があることを述べています。自己の罪障や凡夫性を直接みつめ、救いようのない自己を認識する（厭離）ことよって、往生浄土を求めて（欣求）念仏する心がおこります。このありのままのいたらない自己をみつめて懺悔していくなかに、自然と自己の改善すべき点が見えてくるのであり、阿弥陀仏と極樂浄土を求めて念仏を称えるなかに、おのずから自己の不善を反省し、慈心作善を行う心持ちが出来るのです。このことは、善導・法然より聖阿にいたる浄土宗の流れにおいて変

わらない念仏者のあり方といえるでしょう。そして、念仏相続の生活を基軸とした人間性の向上というものも、阿弥陀仏の本願光明のもと、そうした日々の懺悔や厭欣心の増長とあいまって起こるものであることを、聖阿の教説より教えられます。

### おわりに

以上、聖阿の教説にみられる福祉的思想をみてきました。博覧強記であった聖阿の膨大な著作には、浄土宗という教団を築き上げるために不可欠な自宗僧侶の養成と、他宗僧侶の論難に対する備えがみられます。

そのうち、聖阿の思想上もつとも特徴的な対他宗的立場から説き示された「二藏二教二頓教判」に念仏と諸行との関係をみていきました。聖阿が強調する「有相」と「事相」は、人間が皆いたらない凡夫であり、煩惱を離れられず、同じ過ちを繰り返してしまうという前提に立った上での極めて重要な視点です。極楽が「有相（具体的な姿）」であればこそ明確に行き先を知らしめることができ、そこへ至るための称名念仏が「事相（理解しやすい事象）」であればこそ容易に実修することが可能なのです。無相や離念を説く諸宗の教説や修行がどれほど高妙なものであっても、実修不可能であれば有名無実という他ありません。「有相」の目的と「事相」の修行によって、阿弥陀仏の本願力を蒙るからこそ、いかなる衆生も往生を遂げて悟りへと至るのです。実修不可能な修行では、悟りはおろか往生の道さえ失い、能力の劣る凡夫はいつまでも苦しみの世界を輪廻しなくてはなりません。念仏と諸行とは、阿弥陀仏の大

慈悲本願にかなう行か否か、凡夫の実修可能な行か否かで異なり、いかなるものにも実修可能であり、阿弥陀仏の大慈悲本願の力によって凡夫のままでも平等に救われる点において、念仏は諸行に超出していると聖阿は説くのであります。

続いて、往生浄土を目的とする念仏生活と往生浄土を前提としない慈善活動が、どのような関係にあるのかについてみていきました。聖阿は、念仏者が阿弥陀仏の本願の光明に照らされ、信仰が深化して安心決定すると、厭欣心の増長と三毒煩惱の制止が起こり、これによって自然に慈心が生じて善を行うようになることと述べています。阿弥陀仏の光明の利益たる三毒煩惱の制止については、釈尊の言葉のとおりで言うまでもありません。注目されるのは、無間に念仏を修する生活によって増長する厭欣心や随犯随懺の作用についての言及です。善導や法然の説く念仏の教えに順じた生活を営むことにより慈心や淨心が起こって善を修するようになるという、現実的な変化があることを明言するのは聖阿がはじめてのことです。もちろん、聖阿自身が述べているように、凡夫の起こす淨心であるゆえ、すぐに退転してしまうものですが、変化したことも他人から容易に判別のつくものではないでしょう。しかし、念仏生活中に現実社会の苦悪に気づき、それを見据えて反省していくなか慈善が自然と為されていくというのが、念仏者における慈善のあり方であると聖阿は説いているのです。

ただし、注意しなくてはならないのは、聖阿自身が『浄土略名目図見聞』巻下雑修一十三失において、問う、雑縁乱動す、其の意如何。答う、雑行の中に於いて世間作務の縁に依りて往生の正念を失する行有り。故に失正念故と云う（『浄金』一一・七三三下）。

と述べているとおり、世間的なつとめに励むあまり、往生の正念を失うようではいけないということだ

す。世間的な善を行うことは、浄土宗の教えをいただくものにとっても、当然大切なことですが、往生浄土の心を見失うようでは本末転倒であるということです。聖阿闍梨が浄土宗の出家の心得を『顕浄土伝戒論』に「凡そ出家の人は、如来の大悲に代わって一代の教法を伝持し、一切衆生を利益する」(『浄全』一・二・八九四上)と述べているとおり、浄土宗僧侶にとって往生浄土の念仏の教えを離れて一切衆生の利益はありえません。往生浄土のための念仏相続の生活が基本にあるからこそ、やがて阿彌陀仏の本願の光明に照らされて三心具足し、三心具足の念仏者のために、身も心もやさしくなる身意柔軟や諸々の仏神のみまもりと導きがある諸仏護念等の功德を阿彌陀仏が得させてくださるのです。慈心作善はそうした念仏生活のうちに自然に行われるべきものであり、往生の正念・念仏の相続を忘れてはならないのです。

## 参考文献

## 著作

服部英淳『浄土教思想論』(山喜房佛書林、一九七四年)

坪井俊映『新訂版 浄土三部経概説』(法蔵館、一九九六年)

## 論文

渡辺海旭「無用の弁(新著批判の後に)」(『新佛教』一九〇四年)

渡辺海旭「宗祖中興二祖の教義の異同と現代の浄土宗」(『浄土教報』一九一九年)

渡辺海旭「仏教より見たる労働問題」(『浄土教報』一九一九年)

渡辺海旭「祈禱を要せざる宗教」(『無礙光』一九二二年)

渡辺海旭「法然上人の選択主義」(『無礙光』一八一七、一九二二年)

渡辺海旭「法然上人の教義とその十大特色」(『東光』一九二四年)

林田康順「七祖聖阿闍梨」(『平成二二年度布教・教化指針』浄土宗、二〇〇〇年)

丸山博正「念仏三昧について―善導・法然・山崎弁栄をめぐって―」(『法然浄土教の思想と伝歴』山喜房佛書林、二〇〇一年)

年)

曾根宣雄「法然浄土教における「悪人救済」と「魔悪修善」について」(『法然浄土教の思想と伝歴』山喜房佛書林、二〇〇一年)

---

じょうどしゅう おし ふくしじっせん  
浄土宗の教えと福祉実践

2012年5月11日 第1版1刷発行

---

編者 浄土宗総合研究所仏教福祉研究会

発行者 竹之下正俊

発行所 株式会社 ノンブル社

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F

☎03-3203-3357 Fax.03-3203-2156

振替 00170-8-11093

装丁・石幡やよい

ISBN978-4-903470-63-4 C0015

© Jodo Shu Research Institute Buddhist Social Welfare Project

2012 Printed in Japan

印刷製本・亜細亜印刷株式会社

---

落丁乱丁本は小社宛お送りください。送料小社負担にてお取り換え致します